

## 白石誉二郎翁伝

平成26年4月19日(土) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

### 1. はじめに

別子銅山の鉱脈が尽きた後も地方が栄える「地方後栄の方策」を鷲尾勘解治と二人三脚で実行し、今日の新居浜市の発展の基礎を確立した人が白石誉二郎である。新居浜地方の興隆発展に寄与した白石の伝記である「白石誉二郎翁伝」を解説する。

### 2. 本の刊行

昭和36年 3月 飯尾久松、近藤登喜男、仁田藤馬らによって伝記出版が試みられる。  
しかし、十余年中断される。真鍋寅勝のもとに資料が保管される。

**[3人は新居浜役場時代の職員。飯尾は書記、近藤は書記補、仁田は助役。P. 193の写真説明文参照。]**

昭和48年 9月 白石誉二郎翁伝刊行協賛会結成される

昭和50年11月 白石誉二郎翁伝刊行

### 3. 本の構成

表紙 空押家紋・白石家家紋 背表紙文字は鷲尾勘解治

題字 鷲尾勘解治

発刊のことば 白石誉二郎翁伝刊行協賛会会長 加藤秋年

序文 元住友本社常務理事 鷲尾勘解治

序文 元住友鉱業株式会社社長 三村起一

肖像写真

家族写真

翁の書(短冊、扇面、書簡)

江戸時代後期新居浜絵図(白石家所蔵)

空からみた新居浜市

目次

第一部	白石誉二郎翁伝	266 p
第二部	白石誉二郎翁遺稿	104 p
第三部	白石誉二郎翁を偲ぶ	36 p
第四部	白石誉二郎翁年譜付郷土発展年譜	22 p

#### 4. 記載の概略

##### 第一部 白石誉二郎翁伝

##### 第一章 生い立ち・少年時代

##### P003 誉二郎の生い立ち

明治7年1月5日、新居郡永易村の大庄屋格・父矢野和三郎と母幸の次男として生まれた。(現在の西条市永易。)

－矢野家の説明記述がされている－

##### P015 自助小学校・擇善学校に学ぶ

明治13年4月、新居郡玉津自助小学校に入学する。

明治16年3月、新居郡玉津自助小学校を首席で卒業する。

明治16年4月、擇善学校中等科に進学する。

明治20年3月、擇善学校高等科を首席で卒業する。

##### P021 金子元太郎先生塾に学ぶ

擇善学校高等科を卒業後、松山の金子元太郎の私塾に入る。

－金子元太郎の説明記述がされている－

**[擇善学校は、文化2年(1805)西條藩校として開設された擇善堂と明治3年(1870)の小中学校規則の頒布で開設された西條県小学校が、明治6年(1873)に併されて四大区第一小学校として設立される。明治7年(1874)に擇善堂小学学校と改称される。現在は西条市立西条小学校。**

**西條藩校・擇善堂の碑が堀端の四軒町郵便局の近くに建っている。]**

**[金子元太郎は隣接の船屋の庄屋格・金子家の出身。**

**なお、元太郎にちなみ、西条中学・西条高校に数学の成績優秀の生徒に与えられる金子賞が創設された。]**

##### 第二章 青年時代

##### P027 外側小学校の教壇に立つ

明治23年4月、外側小学校に授業生(代用教員)として赴任する。

尋常小学校教員仮免許の検定試験に合格する。

明治24年4月、新居郡泉川学校に赴任する。

明治24年から27年3月まで東新学校で教鞭をとる。

**[明治20年(1887)、巽学校、智環学校、勝山学校を併せて温泉郡外側尋常小学**

**校として設立される。現在は松山市立番町小学校。]**

P036 白石家の養子となる

玉津から徒歩で泉川学校に通勤していたので、東町の白石又三郎が白石宅からの通勤を進め、仮住まいする。

又三郎の信頼は不動のものとなって、孫のヨネと明治26年1月17日に結婚する。誉二郎20歳。ヨネが白石家を継ぐことが決められていたので、誉二郎は養子になる。

—白石家の家柄の説明記述がされている—

**[玉津～泉川 13km、速足で2時間10分。東町～泉川 8km、速足で1時間20分片道で50分短縮となる。]**

P044 生きた学問に情熱を傾ける

泉川学校から明治27年の春に設立して間もない新居浜高等小学校に招かれる。向学心から同志社大学への進学を募らせたが、跡取の運命と強靱でない肉体的条件で断念する。しかし、実学上の学問を修めることを願望し西洋科学を独学する。

P051 教育界から政界に転出

新居浜高等小学校に着任した7月に、煙害問題陳情委員に担ぎ出される。明治30年、金子村の助役をしていた小野邨雄を新居浜村の村長に迎えていたが排斥運動が起こった。誉二郎は小野村長を擁護した。

煙害問題陳情委員として活動している時、政友会系の政党人の岩崎一高の知遇を得て、郷土愛として政治の場に転換していく。

明治32年1月、新居浜村村会議員に初当選する。26歳。「政治の根本は教育である。」との政治理念は生涯を貫いた。

P058 そのころの誉二郎の家庭生活

明治32年春、約10年間の教職生活から退く。簡素で規則正しく生活する。白石家の門限は10時。

新しい交通手段になった自転車の利便軽快さにほれ込む。逸話1題。

年貢米の逸話1題。

**[誰もが米1粒を大切にした。日本が米の自給を達成したのは昭和38年。コノシロにおからを詰めた姿寿司の郷土料理「いずみや」も節米の料理である。**

**なお、姿寿司の「いずみや」は丸寿司として三津浜方面にも同名である。]**

P063 茶話会(時事問題討議研究会)結成のころ

明治36年、新居郡郡会議員を兼ねる。明治32年から着想していた茶話会を黒川卓三、黒川時二郎と誉二郎の3人で発起人となり、明治36年7月に第1回を開く。茶話会は相互の意思疎通を図り、自らの考えを発表して、社会の文化向上に役立て、郷土の風致を美化しつつ郷土発展に寄与しようとするものである。

郵便局移転の逸話一題。

明治38年6月、養祖父・白石又三郎が亡くなる。

明治41年1月、町議会議員に当選。明治44年8月、町長になる。

### 第三章 町長時代

P069 新居浜町長に推挙される。

明治44年6月、町会で選考委員3人を選んで町長推薦にあたるのが協議され、誉二郎も選考委員に選ばれる。町村改善運動の会の発足の中心になった石井 拓議員(住友の農林課長)を第一人者として推薦するが、固辞される。別子事業所からも最終態度が示されて石井の推薦を断念する。

明治44年7月、満場一致で誉二郎が町長に推薦される。これから27年間の町長を務める。

P077 地方改善、漁業振興、財政公正を基本政策に

町政の基本3項目を議員一同に宣言する。

P080 町民第一主義の政策に着手

町全体は、経済的には安定していたが、協同社会という意識が乏しかったので風紀面で頹廃しやすい傾向にあった。清廉で郷土愛に燃える誉二郎は、この点の克服として地方改善を具体的に図ろうと方針を示した。

明治維新後、土木、勸業、教育、軍事に関する政策は日々実現されたが、医療衛生は遅々たる歩みであった。中須賀、西町の宅地化で下水道の不備が表面化してきたのを契機に、全町の下水道が改善された。

眼病が多くその大半はトラホーム患者であった。憂慮し大正3年、公設の治療所を開所する。

P086 町政の基本姿勢

昭和9年の1月に選挙後の初町会で、貧弱な財政を説明し、財政負担能力の増強を述べる。

人為産業を起こす。

各種産業では自力発展を図る。

町起債は慎重に取り扱う。

都市計画の推進として本町に都市計画法第1条を指定する。

新居浜・西条共同での乗合自動車事業計画。

人づくりとしての教育。

〔新居浜を出たことのない誉二郎の「人為産業=工業を起こす」「人づくりとしての教育」の発想は、書物からの情報入手しかない。人づくりもこれまでの教師の経験だけではない。明治4年(1871)の岩倉具視の海外視察に同行した大久保利光が見た英国の富国は貿易と工業化であり、世界最高水準の工業を支えているのは立派な人格者と驚いている。帰国後、殖産興業化路線を打ち出し実践したことに学んだと思われる。明治の富国論の原典となった岩倉具視の海外視察報告書「特命全権大使米欧回覧実録」は明治11年(1878)に刊行後、明治15(1885)までに4刷りが出ているが部数は少ない。しかし、大正12年(1923)の東京毎日新聞の記事では78万部以上販売とあり広く普及していた。〕

P090 民生のための事業推進

誉二郎は、愛星醤油(株)、大正油肥合資会社、日本絹麻織物(株)、東予製氷(株)、新居浜商事(株)などの企業経営に参画していた。

昭和7年6月に倉敷絹織物(株)の定時総会で住友と提携して人絹工場を新居浜町に創立する旨の発表があり、その後、誉二郎は用水と排水の件で交渉に当たる。築港を利用して新居浜から海外に輸出する銅、肥料、人絹の国際商品を生み出すことを夢見た。

大正7年1月、耕地整理組合の設立申告。農道、排水、灌漑の整備を図る。農業本来から産業経済活動の付随問題である道路整備、企業用地確保等を解決することの比重が増す。

〔住友の新居浜町の地を紹介で始まる。新居浜町役場の沖の向新田に東西185間(約330m)、南北240間(約430m)の工場用地が埋め立てられた。昭和8年1月には第1回従業員を募集。昭和9年3月24日、倉絹新居浜工場が落成。人絹職工1600名。〕

P097 流木事件と選挙違反事件

大正3年9月、暴風で流出した今治町からの木材を拾得した漁民が漂流物横領に問われた。町長として、漁民が盗んだのではなく拾ったと、かばったために偽証罪に問われた。無罪の判決となる。これをきっかけに漁業界と親密になる。

逸話2題。

昭和2年、県会議員選挙で町長を辞して推薦状を配布したら、選挙違反で検挙された。大審院に上訴して無罪を勝ち得た。判決後、町長に復職した。

P106 煙害問題

明治26年9月、新居浜村が「稲作被害原因の現地立会調査」の依頼状を提出し、双方の関係者が実施調査をしたが、原因の結論が出ないで終わった。不満を抱く新居浜・金子・新須賀の農民は愛媛県庁に陳情したが、有効な方策が示され

なかった。農民が住友惣開分店に抗議し、座り込む。

明治27年7月、農民は分店を取り囲み、警察官と衝突する。農民21名が送検される。その後、当地選出の国会議員の藤田達芳が斡旋するが成功しなかった。

住友は製錬所の四阪島移転を公表し、中央の政治舞台での煙害問題が展開される。明治31年5月、大阪鉱山監督署は住友吉左衛門に対して、煙害防止と四阪島へ製錬所移転命令書を発している。

**[藤田達芳：安政5年に神郷の豪農・小野甚三郎の三男として生まれた。藤田吾郎の養子になって別に一家を創立した。早稲田大学の第1回卒業生。明治26年に多喜浜塩田を統合して東浜産塩株式会社を設立して中小企業の合理化を計り、コークスを製造し、その余熱利用による製塩を計画するなど製塩報国に終始した。塩田国有論を提唱して明治36年に成立した塩専売法に導いた。明治37年に衆議院議員に 当選する。胸像は西条藩総肝煎役並びに多喜浜西分東分庄屋役屋敷跡の藤田秀朋宅の庭にある。]**

明治32年8月、暴風雨で新居浜町はもちろん別子銅山も大水害に遭遇する。この大水害で四阪島工事の中止が伝わり農民の反発を招く。県会議員、国会議員を含めての問題に発展し、住友も四阪島工事を続行する。

四阪島での生産活動が再開すると、煙害は広範囲に広がり、被害の声は強くなっていった。そこで県知事の勧告で住友の理事と支配人が越智郡の被害視察をしたが、農民たちは解決を迫った。

足尾や四阪島の鉱毒煙害問題が社会問題となり、鉱毒調査委員会を設け、新居郡も硫煙襲来報告書を提出するように各町村に伝達する。誉二郎は青年委員として案内役を務め、農民の意見が学者によく伝わるように努めた。自らも実地調査し、鉱毒調査委員会に報告するが、調査結果では報告されず裏切られた。

明治42年、尾道で住友と農民が協議の場を持ち、明治43年、農相の裁定で第1回煙害賠償契約が成立する。ところが、昭和3年9月、東新11ヶ町村が煙害賠償契約連合会から脱退する。煙害賠償契約も20年間協定を持続してきたのであるから妥協の精神で解決に当たるべきとの考えと、協定は実害の程度によりなされ、実害の決定は農商務省と県の科学的調査を信頼したらよいので、団体交渉する余地がないとの考えからである。

**[明治32年の別子大水害と呼ばれているもの。新居浜町も9cm～212cmで全域冠水する。この災害を後世に伝える記念碑が、新須賀町の旭地藏堂の碑、庄内町の水害記念之碑、山根町の瑞応寺の別子鉱山遭難流亡者碑、立川町の立川中宿跡の明治三二年水害者供養塔・仁尾の溺死三十三霊之塔などがある。]**

〔煙害問題が起こった当初は、お互いに意思疎通を欠いていたので団体として衝突することもやむを得なかった。以来、双方の妥協点である賠償契約を20年間も維持してきたので、その精神をもってすれば団体交渉の必要がない。実害決定の国・県がする科学的調査を信頼する。東新10ヶ町村は、住友別子鉱山と社会的にも経済的にも特別な関係にあり、近来、会社は奉仕的精神で事業計画を樹立し、地方発展に資することが鮮明であるとともに親善度も益している。他の4郡の町村と連携して会社に対抗することは社会的規範に照らしてもできるものではない。(郷土研究14号を口語要約)〕

なお、脱退した東新の町村に対しては、それ以来毎年5500円ずつが、農業奨励金として寄付された。煙害問題の根本解決後も当分寄付は続けられた。  
(住友別子鉱山史下巻)〕

P121 築港計画と町長誉二郎

新居浜港は昭和46年では四国一の貿易港になっているが、上古には葛籠淵、大江浜と名づけられた漁村であり、昭和初期までは白砂青松ののどかな海岸であった。近々40年ほどの間の発展は、白石誉二郎と鷺尾勘解治を中心としたドラマを想起する。『築港は新居浜の生命線・水は新居浜の栄養素』は、鷺尾が新居浜の繁栄を目指して立てた大築港計画構想を、誉二郎が町として推進する必要性を熱く説いた名文句である。

昭和2年7月、住友別子鉱業所が別子鉱山株式会社となった披露宴の席で、鷺尾が別子銅山の残量は後17年の発言から始まった。

〔『築港は新居浜の生命線・水は新居浜の栄養素』に「育ては時の和の力」が続く。〕

〔**逆断層があって鉱量を過小評価する。実際は逆断層の下にまだ鉱石はあった。残量17年分は昭和19年まで、実際の休山は昭和48年なので40年分を見落としていたことになる。**〕

誉二郎は、「冷水3斗を浴びたような思いがする。」と心痛を表す。「あすの新居浜をどうするか」という命題に対して方策もなく呻吟する。

鷺尾は、「住友が大をなしたのは別子銅山に負う。銅山終末後に見捨てて引き上げることは道徳的に許されない。住友精神に背くことになる。ゆえに住友としては地方後栄の方途を講じる。」と本先に進言し、やがて本社を動かす。

地方後栄の方途

1. 築港と埋め立てをすること。

2. 機械工業を起こすこと。
3. 化学工場の拡張を図ること。
4. 大都市計画を樹立すること。
5. 市民の心を培い、共存共栄の思想を昂揚すること。

この構想を聞いた誉二郎は、町は万難を排してこの現実のために協力して推進していかねばならないと考えた。しかし、鷺尾は事業半ばで本社に去った。二人の交わりは君子のように淡々としていた。

鷺尾の計画は、神戸以西第一の港をつくることであった。

誉二郎は、漁業の将来を考え、町の発展は工業化以外にないとの信念であった。漁民の救済は、子弟を工場へ送り出せは安定するとの考えであった。

本格的築港計画が鷺尾から説明され全貌が明らかになると、最大の困難点は漁業補償であるが、トラブルもなく無事に解決する。

世界的な不況のもとに住友も築港計画も縮小せざるを得なくなったが、有志の東新振興同志会の組織もあり、三村起一によって当初の計画で完成する。誉二郎の持論の「新居浜の生命線」は全うされた。

[身の<sup>すく</sup>疎む思いをしたことをいう表現は、「冷汗三斗」である。冷水を浴びるのは、身を浄める「寒ごおり」であり、体の髓まで冷えたと表現しようとしたのであろうか。「冷汗を三斗かく」の誤用かもしれない。]

[築港の浚渫土を沖合に捨てるには経費が掛かりすぎるので、3町余の向新田を住友より新居浜町に譲渡してもらうよう会社に申し込んだが断られた。鷺尾は将来のために断った。誉二郎は鷺尾の遠大な計画を察知する。電鍍工場の南堤防と向新田の等価交換を行う。運動競技場等の整備に経費が掛かるので、実費2万円で返還することにしたところ、3万円が提供された。(郷土研究59号)]

[「この華かな躍進工都の観衆で者であってはいけない、少なくともその演出者の一員でなければならないと思う。」と、昭和11年1月7日の住友新年宴会のあいさつで述べている。]

[誉二郎は、時代を読み取り、基幹産業と言っても漁業しかない町からマンチェスターを目指した。

後の昭和10年1月の新年宴会のあいさつで、「ニューヨークの波は、御代島を打つなみである。世界目標をおいて考えねばならない。」と述べ、世界的視野を持っていた。]

[昭和4年(1929)から昭和8年(1933)にかけて発生した世界的な恐慌に見舞われる。第一次世界大戦の戦勝国になったが、その後の恐慌、関東大震災、昭和金融恐慌によって弱体化した日本経済は、世界恐慌の発生とほぼ同期に行った金解禁の影響に直撃され、主にアメリカ向けに頼っていた生糸輸出が急激に落ち込み、危機的状況に陥る。一時回復するが、イギリス連邦のブロック政策で締め出され、貿易相手が台湾、満州の円ロックに限定されていく。]

[鷺尾が昭和6年2月に新居浜を去ると計画は縮少の宣託を受ける。村上高太郎、藤田熊次郎、田坂基、手島連三、塩崎由太郎、森実竹一、白髪茂、木下伝次(伝次郎?)、深尾猛、藤田一次、佐藤紋次、藤村金助、池田寅雄等が協議して、昭和7年2月に東新振興同志会を結成する。新居浜築港工事ほか、別子銅山後継事業の実施を要求し、小倉総理事から約束を得る。(郷土研究169号)]

P142 交通運輸の開発

工業都市の建設には、動脈になる交通運輸面の整備が必要と、鷺尾と誉二郎は考え、6間道路の昭和通りを建設する。鷺尾は地方後策、誉二郎は道路計画ノ大綱で。町は大綱に基づき港から金子村を経て新居浜駅までの道を立案したが、金子村の反対で中止。鷺尾は作務で実施。

[昭和通りは、県道西條新居浜土居線の新居浜、金子分に当たる。全長1195間9分、幅員6間、昭和橋、申孝橋、共存橋、共栄橋の4橋。用地は全て地元新居浜町、金子村の寄付、工事費63,856円。工期は昭和5年2月7日～昭和6年6月10日、7月5日祝賀開通。(郷土研究47号)]

※昭和橋： 昭和の御代に掛けたことによる命名。

共存橋、共栄橋：「企業は労働者・地方の繁栄と共にその利を同じくして栄える」との考えから命名。

申孝橋： 「徳をたつること申孝なり」からきている。申孝とは、正しく清らかな心、私心のないことの意味。

昭和通りの開通は、工業都市としての発展を望み、他の地域を有機的につなごうと考えた。昭和6年に関係町村で期成同盟を結成した。昭和9年に新居浜・西条の県道が開通する。

次に新居浜と高知間の最短道路の建設を提唱する。東平から日浦までの坑道の利用を考えていたが、鉾山側の計画が中止となり、計画は放置された。

伊野と新居浜を結ぶ四国横断鉄道を提唱したが、実現しなかった。新居浜駅の改修と新居浜駅を中心に一部のダイヤ改正を誓願する。

P156 県会議員出馬を断る

昭和2年9月の県会議員選挙で、新居郡からの2名の候補者としてトップで推薦を受けるが辞退する。新居浜から踏み出さず、地方発展に専念する。

P157 教育に真剣に取り組む

大正11年、新居浜実業補習学校を開設する。(夜間修養)大正15年、公民学校と改称する。

大正13年1月、新居浜実業補習学校生徒文庫と新居浜児童文庫を合同して新居浜青年文庫を開設する。昭和5年4月、公立図書館を開設する。

昭和5年、我が国は大不況下にあり、小学校教員の給与を1割寄付することを県下市町村長会で決議しようとした時、誉二郎は、財政難の際も初等教育尊重の考えから反対した。

昭和6年、県当局の青年教育振興会組織の動きに対して、新たに組織せず青年団、在郷軍人会が青年教育をすることを後援する

昭和5年、東予11ヶ町村長で教育助成を実践するため、煙害賠償金の一部を基金に充てて財団法人新居農学校後援会を組織し、理事長になる。新居浜・西条地区が急激に工業地化し、既設農学校に工業科を併設することを痛感すると共に取組を進め、昭和13年4月、県立新居浜工業学校を創立する。

昭和10年7月、新居浜青年学校が誕生する。

P169 文化的贈りもの武徳殿

昭和13年11月、青少年の心身を鍛錬するために町長退職の記念料3万円と住友からの記念料1万円を投じた武徳殿が落成する。

**[新居浜市における武道奨励、武徳高揚の目的で建築され、昭和14年7月6日に市会で採納決議される。建設に当たっては、明治32年に建設された京都の武徳殿(重要文化財)を参考にしたと思われ、建物全体の造りやガラスの高窓にみられる近代和風の取り込みなど多くの共通点がある。請負業者は、大阪市の株武智事務所。平成16年3月2日に国の登録有形文化財に登録。]**

P171 女子教育の充実

誉二郎は、「町を興すのは人にあり、故に人づくりが基礎である。」と説き、施策として第一に小学校教育と小学校教師、第二に家庭教育とその中心である母親について心を配った。

大正6年4月、新居浜町立新居浜実科女学校を創設する。

大正8年4月、新居浜実科高等女学校に昇格する。

昭和2年4月、新居浜町立新居浜高等女学校に昇格する。

昭和9年6月、三代目校長に長男の捷一を迎える。四恩の鐘の教育実践。

昭和14年8月、捷一は高知師範学校校長に転出する。

P179 多年の功績により知事表彰を受ける

大正13年2月、村会議員、町会議員、町長としての長年の新居浜町発展に尽くした貢献により知事表彰される。

#### 第四章市長時代

P181 新居浜市誕生の胎動

昭和8年10月10日、新居浜町会は全員一致で新居浜・金子・高津の合併を決議する。しかし、11日の三カ町村の会合では金子側委員の義がまとまらず、合併大綱は可決することが出来なかった。なお、高津側は、将来に進展すると見込んで即日可決する。

P186 日章会

明治44年5月、自治精神の養成、道徳の実践、経済の発展、儉約の美風の4つを目標として、町民を一団とした日章会が生まれる。その後、政府から種々の会の結成が勧められたが、日章会で事足りると結成しなかった。

会長に石井拡、副会長に白石誉二郎が就任した。石井が新居浜を去ると会長に誉二郎が推されたが、固辞し空席のままにした。

昭和初期になると日章会の活動も形骸化してきたので、昭和10年に専任者を充てて組織を復興させた。当時の活動内容は、納税徴集納付、みぞ掃除、はえ・か等の駆除、葬儀の手伝い、祝日の国旗掲揚運動、勤儉貯蓄の奨励、レクリエーション、映画鑑賞、会員の弔慰金抛出等。

昭和12年11月、新居浜市が誕生した以上、旧町村が一致融合して繁栄するように、新居浜町の日章会を解消して金子、高津も含めた運動に拡大した。

P192 新居浜市誕生・初代市長に選ばれる

金子村が時期尚早としていた合併問題は、昭和12年になって再燃した。同年11月1日で市制実施と上申ししていたが、内務省の都合で11月3日になった。12月の第1回新居浜市会で市長に白石誉二郎、市会議長には国会議員でもある小野寅吉が選出された。

**[小野寅吉：慶応2年沢津村の篤農家に生まれる。高津村村会議員、高津村村長、県議会議員を務める。吉岡泉を掘削して川東地区の水不足を解消する。以後、衆議院議員、新居浜市議会議長を務める。吉岡公園内に銅像が立っている。]**

金子村、高津村の財産は各村において処分することに変更する。より有意義な処分方法として、財団法人新居浜公益会を組織することの結論に達し、昭和13

年10月に認可、設立する。白石誉二郎が、理事長に推挙される。

将来の都市計画も考慮して昭和13年6月、繁本町に新居浜公会堂建設に着手する。昭和14年6月に完成する。

市庁舎は新居浜町役場庁舎を使っていたが、将来東新一体を合併した大新居浜市建設の構想を持っていたので、昭和16年9月、神明町に建設を着手した。昭和19年4月に完成したが、昭和25年1月に全焼した。昭和27年5月、再建完成した。

**[神明町： 以前は一宮町、繁本町の一部を神明町と呼んだ。神明は天照大神をさすが、単に「神」という意味で用いられる。一般的には、神明町はその地域の一の宮のあるところの町名として命名される。**

**大江橋から新居浜郵便局西側の市道の大江橋久保田線は、以前は大江橋神明線と命名されていた。]**

#### P203 四国一の工業都市建設へ

「新居浜の発展を図るには、住友事業に順応していかなければならない。企業が事業を興すのに都合のよい条件を整えるべきである。」が白石市長の大根本であった。具体的には、築港の完成と海陸交通の便を図る。土地、水を大切に、勤労を愛する労働者を育てる。これら工業化と併せて隣接農村の更生を考えた。

「地方発展の先決問題は、新居浜港を改修して事業を誘致する。」との考えから、昭和2年の住友鉱山会社の8万坪埋立、窒素工場建設事業で、漁業権提供を関係新居浜漁民に説き同意を得て、築港計画を容易に樹立する要因をつくった。

昭和4年、住友の新居浜港修築計画に不眠不休で奔走して協力した。昭和8年着工、新居浜市百年の大計として昭和12年完成。

日華事変が拡大するにつれて四国一の工業都市新居浜市に若者も動員され、若者で活気にあふれた。住宅建設ラッシュが続く。

中小企業者に対して、市民がお互いの資本を融通して共存共栄の実をあげる機関が必要であった。昭和13年11月、新居浜市街地信用組合の設立許可が愛媛県からおりる。(現在の東予信用金庫。)

郷土発展の念願から、昭和17年11月、国道24号線改修を陳情する。昭和18年2月、尻無川改修を陳情する。

#### P210 国立高等工業学校の誘致と中学校の整備

昭和13年政府は、既設の16高等工業学校のほかに10校近く新設する計画を進めていた。白石市長は工都・新居浜の将来を考えて関係者の協力を求め、ひそかに受け入れ体制を整えて待機した。昭和14年2月、新居浜市は要望を政府に伝え、同年3月に設置決定を得た。設置場所の用地買収は難航したが昭和14

年7月に機械科、工作機械科、電気科、採鉱科、冶金科の5科で、庄内(現在の八雲町)に開校した。

工都・新居浜の発展のために工業教育の充実として、新居浜農工学校から機械科を分離独立させて、金子の工業作業場に県立新居浜工業学校を昭和13年4月に開校した。機械、作業設備は住友機械、住友化学の援助を受けた。

普通科の中学校については西条中学まで通学していた。中学校開校で県当局と交渉したが財政的理由等から進展せず、白石市長は市立にしてでも開校を考えた。3月31日までなら認可の可能性があるとの情報を受け、電光石火、昭和15年4月に住友惣開の青年学校を校舎に借りて開校する。昭和16年3月、県立に移管する。新校舎建設は別子銅山開坑二百五十周年を記念して住友鉱業からの寄付金50万円と市費で、新須賀乙110番地(現在の東雲町)に根昭和18年3月に落成する。

昭和15年4月、市立新居浜高等女学校は県立に移管する。

#### P221 市長退任

市長就任後3年目の昭和15年7月19日から8月9日まで、札幌での全国市長会の実態を見分し、市政へのプラスを考えて出席する。元来、頑健でない健康状態からして相当無理を押しての旅であった。

昭和18年1月、誉二郎・ヨネ夫妻は金婚式を迎える。

新居浜市誕生と同時に初代市長に選任されて6年有半にわたって新居浜市の発展に全力を傾けてきたが、健康を害して昭和19年5月4日、市長を辞任する。明治、大正、昭和の三代にわたり新居浜のために残した業績は、「村夫子<sup>そんぶうし</sup>」として町を出ず、すべてを町に尽くすとの信念の果実であった。

**[村夫子： 村の学者、田舎の先生。見識の狭い学者をあざけていう。誉二郎の場合は、謙遜して地元<sup>そんぶうし</sup>に尽くす人の意味で使用。**

**五十嵐信之著「川田順」P5には、田舎の素封家の息子に「大学」などを教える家庭教師、とある。]**

## 第五章 晩年の白石翁とその周辺

#### P227 新居浜国民教育振興会設立－教育会館の建設

市長辞任の退職慰労金の有効な利用方法として教育会館の新設を企画したが、国家緊急事態の時であったために許可されなかった。

教育会館設立の精神を生かした財団法人新居浜国民教育振興会を設立する。戦後は市内小学校の小学校校長会に引き継がれた。

誉二郎の教育会館建設の悲願は、昭和44年9月、一宮神社の樟樹の森に教育関係者の総力で完成する。

P233 強制疎開と愛孫の戦死

昭和20年4月、大江の軍需工場に通ずる道路拡張のため強制疎開となる。昭和通り、東雲町、平形町と転居する。終戦後、人の手助けで旧邸跡に15坪の新居を構える。

愛孫・理一郎の名誉の戦死の葬儀を、取り壊し直前の旧宅で行う。

戦後の農地解放で35町歩を手放す。残ったのは3反。

市長退任後は、新知識を得ようと読書生活を続けた。

P237 愛媛伸鉄興業株式会社の設立

戦後の復興の一助として昭和21年3月、愛媛伸鉄興業株式会社を設立する。

P292 終焉

昭和26年4月18日、捷一の市長当選の報に接することもなく召天された。

76歳であった。4月22日の葬儀には、何千人もの人が会葬した。

P242 白石誉二郎翁の人柄

謹厳実直、質素堅実の人であった。一逸話で人徳を偲ぶ一

P250 白石誉二郎翁と大本教

大正8年、第六高等学校(現在の岡山大学)に在学中に長男・捷一の入信が大本教との出会いである。菩提寺が禅宗であることもあって、この問題で苦悶する。

白石家で大本教が迎えられると、必然的に新居浜での宣教活動拠点になる。大正10年1月、白石家邸内に神殿を造営する。皇道大本清風会支部と称する。大正11年7月、二代教主・すみ子に随行していた二男・剛が亡くなる。大正14年、三代目教主・直日が白石家に宿泊する。昭和3年、聖師・王仁三郎が白石家に2度目の来訪をする。昭和4年3月、御船・瑞祥丸の進水式に王仁三郎を迎える。大本教檀から打ち出された「昭和神聖会」の発足が全国展開をする中。昭和9年7月、二回の分院に聖師を迎えて歌碑除幕式を挙げる。

昭和10年2月、大本教団は大弾圧を受ける。弾圧の波は誉二郎にも及ぶ。友の小笠原誠雄が、大本教機関紙に投稿したとのことで連行され自宅捜査される。歌碑が削られたうえ埋められ、瑞祥丸は尾道に曳航される。

信念によって信仰に生きようとした誉二郎であったが、結果において独裁的権力の前では市井の人として屈せざるを得なかった。

**[大本三代教主補になった出口日出麿は、大正8年に岡山の第六高等学校在学中に入信。その後京都大学に進学した。白石捷一も同じく大正8年に第六高等学校在学中に入信し、京都大学に進学した。捷一の入信は、岡山での日出麿との出会いからかではないか。]**

## 6. おわりに

白石誉二郎の生い立ちは、周辺の状況から人格に迫ろうとしているが定型的記述に陥りリアリティー性が欠如しているように感じられる。環境決定論で論じていくと画一的な人格形成になる。環境に影響されながらも個としての可能性の発芽がどこなのかを論じるべきである。逸話から人柄を引き出そうとしているが、生活面の画一的な表現は一般論的な人格表現となって人間味にかける。読書量が多いが、どの本によって地域福祉、村夫子になろうと決意したかが解き明かされていない。

経歴の骨子は、何年に何になった、何をしたでしかない。本文中の引用文や第二部の遺稿編が誉二郎の言葉であり、考え、人柄が読み取れる。大半を郷土研究の紙面の再掲に依るが、改めて郷土研究をめぐる労力が省かれる。新居浜町が発行していた郷土研究の歴史的資料価値が高まっている。

市庁舎が火災に公記録が消失したのは、行政執行上でも困難に直面したが、市長を務めた人の足跡を知る資料としても大きな損失であった。

一生を新居浜地方の発展にささげたといっても過言でない生き様が、この本からは読み取れる。白石誉二郎は、地方繁栄の方程式を作った人である。

いつの頃からか、机のデスクマットの下に誉二郎の郷土への視点の箇条書きがある。(講座のレジュメ作成で「郷土研究」を読んで、「創刊の辞」の9項目のうちの初めの6項目であった。)

一、郷土は吾等を生み、吾等を育てた。

郷土は吾等を働かせ、又吾等を休ませる。

二、吾等是他郷に出ても、夢は故郷に帰り、産土のもりに遊ぶ。

人間到る處、青山あれども、亦時々錦着て故郷を訪ふ。

三、郷土は、永久に吾等の父であり、魂の母である。

四、郷土によって色づけられた個性は、社会文化の特殊性を増し、  
国家人類の進展に資する。

五、現在は過去に育み、みらいを芽ぐむ。

将来を左右せんとするものは、現在に立脚し、現在に立脚せんと  
するものは、過去を知らねばならぬ。過現未は通じて一体である。

六、郷土を愛し、郷土の為に尽さんとするものは、又よく郷土を  
知らねばならぬ。

初代新居浜市長 白石誉二郎

【参考文献】 日本産業革命 石井寛治 講談社学術文庫  
明治維新と西洋文明 田中 彰 岩波新書

# キーワード

2014. 4. 18 坪井利一郎

白石誉二郎翁伝を読むと、誉二郎の生涯は 5 つのキーワードで示される。一回限りの人生を歴史との偶然の出会いを必然に変えて、見事に生き抜いた人物である。日々苦闘したであろうが、振り返ると新居浜市の恩人の一人であり、村夫人というよりも聖人と思える。

## 1. 東町の白石又三郎の養子となる

現在の西条市永易の矢野家に生まれたが、白石ヨネと結婚して新居浜人になる。教育者から政治家になる。村会議員、郡会議員、町会議員、町長、市長。

人づくりから町づくり。

## 2. 煙害賠償契約連合会から脱退

社会的常識に生きる。

地域と住民が依存体質に陥らないようにと、自立・主体性体質の確立。

第一次産業主体から第二次産業への歴史的先見性。工業化。

## 3. 別子銅山の残鉱量 17 年分・地方後栄策

鷲尾勘解治(住友)との二人三脚。逆手の発想。

新居浜市のまちづくりの基盤をつくる。

工都・新居浜への方向性を確立する。

## 4. 武徳殿

社会貢献。郷土愛。

教育者への回帰 郷土建設の人づくり。

## 5. 村夫子

向学心に燃えながら進学できず独学で西洋科学を学ぶ村夫子。

知の情報を郷土で活用する。グローバルに学びローカルに生きる。新進性に富む。

産業革命のイギリスを目指す。

※新居浜人になって、新居浜の歴史的発展を見極めて、リーダーとして切り開き、なおかつ、未来への準備も怠らなかった。郷土愛で貫いた一生であった。

## 初代新居浜市長・白石誉二郎から学ぶ郷土愛

平成26年7月13日(日) 14:00~14:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

### 1. はじめに

40年前からか、デスクマットの下に白石誉二郎の郷土への箇条書きがある。地方自治に生きる覚悟として長年見てきた。それは、「郷土研究創刊の辞」の9項目のうちの初めの6項目であった。キャッチ・コピーの名手の言葉は、時を経ても色あせることがない。

- 一、郷土は吾等を生み、吾等を育てた。  
郷土は吾等を働かせ、又吾等を休ませる。
- 二、吾等是他郷に出ても、夢は故郷に帰り、産土のもりに遊ぶ。  
人間到る處、青山あれども、亦時々錦着て故郷を訪ふ。
- 三、郷土は、永久に吾等の父であり、魂の母である。
- 四、郷土によって色づけられた個性は、社会文化の特殊性を増し、  
国家人類の進展に資する。
- 五、現在は過去に育み、みらいを芽ぐむ。  
将来を左右せんなどするものは、現在に立脚し、現在に立脚せんと  
するものは、過去を知らねばならぬ。過現未は通じて一体である。
- 六、郷土を愛し、郷土の為に尽さんとするものは、又よく郷土を  
知らねばならぬ。

初代新居浜市長 白石誉二郎

別子銅山の鉱脈が17年で尽きた後も地方が栄える「地方後栄の方策」を鷲尾勘解治と二人三脚で実行したのが白石誉二郎である。新居浜に一生涯留まり、地方の発展にささげた翁は、村夫子としてグローバルに学び、ローカルに生きた。その精神は郷土愛に尽きる。

**[村夫子： 村の学者、田舎の先生、素封家の息子に「大学」などを教える家庭教師。見識の狭い学者をあざけていう。誉二郎の場合は、謙遜して地元<sup>とげん</sup>に尽くす人の意味で使用。]**

### 2. 主人公

誉二郎は、まさしく禅語でいうところの「主人公」である。

瑞巖とげんの師彦和尚は、毎日自らを主人公と呼び、自ら応諾した。しっかり目を覚まして本来の面目を保っているかと、自問自答した。ドラマの主人公ではない。本心本性の自己、

真実の自分のこと。純粹な自己。自分の中の主人公を忘れずに生きようとの喚起。人間とは、日常的自我と本質的自我の同行二人で歩む旅人である。

「この華かな躍進工都の観衆者であってはいけない、少なくともその演出者の一員でなければならないと思う。」と、昭和11年1月7日の住友新年宴会のあいさつで述べている。一見傍観者であってはいけないと述べているが、述べている人は舞台の上に立っている者であり、舞台を見上げて監督をしている者でもある。同行二人の二役に精通している者である。絶対他者即絶対自者。(志の発現者は絶対に他なるものであると同時に、実は真の自己の根底であるところの絶対的な主体である。)

### 3. 郷土愛

誉二郎は、元は現在の西条市永易の庄屋格であった矢野家の人であった。東町の白石ヨネと結婚して新居浜人になる。教育者から政治家になり、村会議員、郡会議員、町会議員、町長、市長を歴任する。漁業主体の新居浜町の発展として、自然産業に限界を覚え、人為産業に活路を見出す。

昭和2年7月、住友別子鉱業所が別子鉱山株式会社となった披露宴の席で、鷲尾が別子銅山の残量は後17年との発言から始まった勘解治の地方後栄の方途。

1. 築港と埋め立てをすること。
2. 機械工業を起こすこと。
3. 化学工場の拡張を図ること。
4. 大都市計画を樹立すること。
5. 市民の心を培い、共存共栄の思想を昂揚すること。

昭和9年の1月に選挙後の初町会で、誉二郎は、町政の基本姿勢として6項目を述べた。

1. 人為産業を起こす。
2. 各種産業では自力発展を図る。
3. 町起債は慎重に取り扱う。
4. 都市計画の推進として本町に都市計画法第1条を指定する。
5. 新居浜・西条共同での乗合自動車事業計画。
6. 人づくりとしての教育。

勘解治と誉二郎の目指したのは、神戸以西で第一の港を作ること、イギリスのマンチェスターを目指すこと。グローバル、オールジャパンで考えた物流拠点の建設と生産拠点の建設である。後背地の整備が予土道路建設の着想であり、鉱山町から工業都市への転換が、地方後栄策の実現である。その要は「人づくり」と多元的に考えた。

歴史は人を生むと言われるか、鉱石枯渇の危機を逆転の発想で乗り越えた人が、勘解治と誉二郎である。二人の人生を見ると「教育者」が、共通項はである。その原点は「共に生きる」である。「モノ」づくりの町・新居浜の基盤をつくり、発展の方向性を確立したことにより、二人の郷土愛は今に生きている。

#### 4. 菅二郎の業績

01. 愛星醤油(株)、大正油肥合資会社、日本絹麻織物(株)、東予製氷(株)、新居浜商事(株)などの企業経営に参画
02. 倉敷絹織物(株)の人絹工場の用水と排水の条件整備

[新居浜町役場の沖の向新田に東西185間(約330m)、南北240間(約430m)の工場用地が埋め立てられた。昭和8年1月には第1回従業員を募集。昭和9年3月24日、倉絹新居浜工場が落成。人絹職工1600名。]

03. 耕地整理組合設立と農道、排水、灌漑の整備
04. 煙害賠償契約20年後の東新11ヶ町村が煙害賠償契約連合会脱退と住友と信頼関係を構築

[煙害問題が起こった当初は、お互いに意思疎通を欠いていたので団体として衝突することもやむを得なかった。以来、双方の妥協点である賠償契約を20年間も維持してきたので、その精神をもってすれば団体交渉の必要がない。実害決定の国・県がする科学的調査を信頼する。東新10ヶ町村は、住友別子鉱山と社会的にも経済的にも特別な関係にあり、近来、会社は奉仕の精神で事業計画を樹立し、地方発展に資することが鮮明であるとともに親善度も益している。他の4郡の町村と連携して会社に対抗することは社会的規範に照らしてもできるものではない。(郷土研究14号を口語要約)

なお、脱退した東新の町村に対しては、それ以来毎年5500円ずつが、農業奨励金として寄付された。煙害問題の根本解決後も当分寄付は続けられた。(住友別子鉱山史下巻)]

05. 「築港は新居浜の生命線・水は新居浜の栄養素」と、鷺尾の大築港計画構想を推進

[築港の浚渫土を沖合に捨てるには経費が掛かりすぎるので、3町余の向新田を住友より新居浜町に譲渡してもらおうよう会社に申し込んだが断られた。鷺尾は将来のために断った。菅二郎は鷺尾の遠大な計画を察知する。電鍍工場の南堤防と向新田の等価交換を行う。運動競技場等の整備に経費が掛かるので、実費2万円を返還することにしたところ、3万円が提供された。(郷土研究59号)]

06. 昭和通りを建設

[昭和通りは、県道西條新居浜土居線の新居浜、金子分に当たる。全長1195間

9分、幅員6間、昭和橋、申孝橋、共存橋、共栄橋の4橋。用地は全て地元新居浜町、金子村の寄付、工事費63,856円。工期は昭和5年2月7日～昭和6年6月10日、7月5日祝賀開通。(郷土研究47号)]

※昭和橋： 昭和の御代に掛けたことによる命名。

共存橋、共栄橋：「企業は労働者・地方の繁栄と共にその利を同じくして栄える」との考えから命名。

申孝橋： 「徳をたつること申孝なり」からきている。申孝とは、正しく清らかな心、私心のないことの意味。

07. 新居浜実業補習学校を開設
08. 新居浜実業補習学校生徒文庫と新居浜児童文庫を合同して新居浜青年文庫を開設(後の公立図書館)
09. 煙害賠償金の一部を基金に充てて財団法人新居農学校後援会を組織し、県立新居浜工業学校を創立
10. 町長退職の記念料3万円と住友からの記念料1万円を投じて武徳殿を建設寄贈

[**新居浜市における武道奨励、武徳高揚の目的で建築され、昭和14年7月6日に市会で採納決議される。建設に当たっては、明治32年に建設された京都の武徳殿(重要文化財)を参考にしたと思われ、建物全体の造りやガラスの高窓にみられる近代和風の取り込みなど多くの共通点がある。請負業者は、大阪市の株武智事務所。平成16年3月2日に国の登録有形文化財に登録。]**

11. 新居浜町立新居浜実科女学校を創設
12. 新居浜市の誕生
13. 自治精神の養成、道徳の実践、経済の発展、儉約の美風の4つを目標として、町民を一団とした日章会を結成
14. 財団法人新居浜公益会を組織
15. 新居浜公会堂建設
16. 新居浜市庁舎建設
17. 新居浜市街地信用組合の設立(現在の東予信用金庫)
18. 国立高等工業学校の誘致
19. 新居浜中学校開校(現在の新居浜東高等学校)
20. 新居浜国民教育振興会設立し、教育会館を建設
21. 財団法人新居浜国民教育振興会の設立
22. 愛媛伸鉄興業株式会社の設立